

「障害も個性」か？

最近、障害について「みんなちがって みんないい」とか、「障害は個性」という言葉をよく耳にします。

私は「障害」とは、日常生活上の「不自由さ」と考え、その不自由さを取り除く努めは、当人以上に周りの方々（社会）の責務であると考えています。そこで、メル友に意見を求めたところ、多くの意見をいただきました。障害児等に係わったことのない方と、長年日々係わっている方の意見（抜粋）を紹介します。他の方の意見は、この両極の間のどこかに位置するかなと思われました。さて、あなたのご意見は、どこに位置すると思われませんか？

：「みんなちがって みんないい」とか「障害は個性」とか、わたしもこのように考える一人です。障害のあるなしに関係なく、人それぞれ考えたり、思ったり、感じたり、悩んだり、喜んだりすることなどは自由だと思うからです。もちろん障害があることで不自由をしているということは事実だと思うけれど、だからといってその人の中身まで全てを援助するのではなくて、その考えを認めたり、一緒に考えたりするという意味で「みんなちがって みんないい」のではないかと思います。

：個性はその人の特性やその人特有の性質や性格であると辞書に掲載されている。障害については、その原因が様々である。いわゆる健常者を中心とした社会的枠組みの中では、障害を受けた年齢や原因となった因子あるいは成長過程での家庭環境や生活者としての社会環境により、人格形成に大きな影響を受けている。さらに社会的に被る経済的・政治的な不利益や不平等、人権侵害など多数存在し、再生産されている。このような中で、「みんなちがって みんないい」とか「障害は個性である」とかいう表現は、現象を認知しただけの話であって、決して分析的に、改良的に見る視点に立っているわけではない。極めて情緒的な表現である。一見、障害を理解しているように見えて、実は現実に必要な生活者あるいは市民としてのニーズの掘り下げをあいまいにしている。障害という不自由さを、その人の個性や性質にされたのではたまったものではない。障害という事態を克服して、社会を改良していくことは社会の責任であり、福祉というものである。

（2003年02月13日記）